

佐藤慎一郎著

『大観園の解剖——漢民族社会実態調査——』

原書房 2002年 xxv+294ページ

なか お かつ み  
中 生 勝 美

「大観園」とは革命以前の中国ハルピン市にあった貧民窟の名称である。そこには安宿があり、アヘンの密売、売春、賭博が行われ、乞食や盗人たちの巢窟であった。本書は1941年に「満州国」総務庁事務官をしていた佐藤慎一郎が単身で調査した記録である。編集後記によると、本書は1941年に満州国警務総局保管局の内部資料として編纂され、83年に原書房より『魔窟・大観園の解剖』として復刻され、今回の復刻では著者名を明記したという。「大観園」は現在のハルピンで地名としては残っているけれども、その痕跡さえも見ることはできない。それだけに「満州国」にあった貧民窟である大観園の報告は歴史的な価値がある。

著者は戦後の早い時期からアジア経済研究所のプロジェクトに参加し、『中国共産党の農業集団化政策 I・II』（アジア経済研究所 1961, 1962年）および『農業生産合作者の組織構造』（アジア経済研究所 1963年）に執筆している。評者は当時プロジェクトに関係していた小島麗逸氏から本書の話聞いたことがある。著者が所蔵していた『人民日報』をアジア経済研究所が引き取ることになり、小島氏が著者の自宅に出かけたところ、本書の初版を見せて執筆者は自分だということを明かしながら、調査の苦労話を語ったという。著者は大観園に住み込んで調査をしたのだが、極秘の調査だったのでゆったりした中国服を着てズボンのポケットに手帳をしのぼせてメモをとり、食器についた雑菌で病気になる恐れがあるので、いつもアルコール度数の高い酒を注文し、それで食器や箸の殺菌をしながら食事をしたという。

著者は「満州国」建国10年にしてハルピン市内で統治権の及ばない無法地帯を調査する必要があると企画立案して調査をしたようである。その貧民窟の

中心的な生活基盤である安宿の経営形態、その宿泊人の生活を支える売春、賭博、アヘン、乞食、盗品市について個別具体的に記述している。特に売春を生業とする女たちと、そこに群がる男、その稼ぎ人がアヘン中毒となり、最後に末期症状を呈した宿泊人が身ぐるみ剥がされ、まだ死亡していなくても丸裸で路上に遺棄される様子が生々しく記述されている。

本書の記述は、人間性を喪失した貧民街の人々に対して「満州国」統治者としての眼差しで冷酷に取り調べをする観点が貫かれている。母や妻、娘に売春させながらアヘンに耽溺する男たち、アヘン中毒から廃人になるプロセス、さらにはその廃人をいかに安宿から路上の真ん中に遺棄するかなど、他の類書では記述をはばかりの内容ばかりである。戦後になって著者は戦争犯罪容疑で瀋陽の戦犯収容所で過ごしたのだが、「満州国」時代に自分が中国人に対して傲慢であったことを悔いている（佐藤慎一郎選集刊行会『佐藤慎一郎選集』私家版 1994年 276ページ）。

著者の最初の著作は、『満洲及満洲人』（満洲事情案内所 1940年）で、日本人が満州で生活するために必要な中国人に対処する知識のマニュアルをまとめたものである。前述した戦後の人民公社をめぐる研究、さらに香港に逃亡した中国大陸の農民から聞き取りをすることで人民公社の状況を研究した『中国「人民公社」実態調査ノート』（大湊書房 1980年）など、敗戦をはさんで著者の中国研究は絶えず国家がいかに社会底辺の人々に影響を与えているかに関心をもち続けて行われた。

『大観園の解剖』は、「満州国」の警察機構が必要とした貧民窟住民の生活実態を記しており、調査対象の特異さゆえに奇異な目で見られる。しかし山東省を中心とする華北地域から「満州国」に出稼ぎにくる移住パターンが定着していた革命以前の中国で、出稼ぎの落伍者や乞食という社会の底辺に記述した報告書は、本書以外寡聞にして知らない。当時の時代的制約を割り引いても本書の資料的な価値の高さは変わらないと思う。

（大阪市立大学大学院文学研究科助教授）